

体育文化館隣の新公園に、豪州・コフスハーバー市との姉妹都市提携を記念してクスノキ1本が植樹されていることを皆さんはご存知でしたか？ 当時は高さ5m程度の本でしたが、20年を経過した現在は立派なクスノキ（写真）に成長しています（クスノキの根元には記念碑があります）。広報紙が市役所と市民の皆さんとの懸け橋としてもっと役立つように、広報担当3年目となったわたしもクスノキのように成長していきたいと思います（Y）



元 気 な
朝 ご は ん
レ シ ビ 24



大根葉とじゃこの
まぜごはん

ヘルシー
クッキング
コンテスト
学生部門
最優秀賞

- 材料・4人分
- 大根葉 1本分(100g)
 - ちりめんじゃこ 30g
 - 鶏ひき肉 100g
 - 白ごま 大さじ1
 - ごはん 600g
 - しょうゆ 小さじ2
 - 塩 小さじ1/4
 - コショウ 少量

- 作り方
- ①大根葉はゆでて細かく切り水気を切る。
 - ②ちりめんじゃこと白ごまを空いりする。
 - ③①と鶏ひき肉を炒める。
 - ④③に②を入れて、塩、コショウ、しょうゆで味付けする。
 - ⑤炊きたてのごはんと④を混ぜて、出来上がり!

- 1人分の栄養価
熱量350kcal、たんぱく質11.9g、脂質6.8g、塩分1.4g
- ワンポイント
捨てられることが多い大根葉を利用した混ぜごはんです。捨てるのがもったいないと思わせるおいしさです。
- 考えていただいた人
田向(たむこう)香奈絵さん(佐世保北中3年)

市長日記



ノーベル化学賞受賞の下村脩博士を名誉市民に!

白南風尋常小学校卒業、旧制佐世保中学校（現佐世保南高・佐世保北高の前身）入学（途中転校）の下村脩博士がノーベル化学賞を受賞されるというビッグニュースが、去る10月9日に報道されました。



昨年、本市へ帰郷された下村博士

その直後に、わたしは旧制佐中時代の同級生の方にメールアドレスをお聞きし、お祝いのメッセージを送ることにしました。メールには、受賞決定の翌日に一回も面識のない方に大変厚かましいとは思いましたが、松尾市議会議長の了解を得て、「名誉市民に推薦したいのでぜひお受けいただきたい」旨のお願いの言葉も添えました。

長い人生のうち、短い期間であったとしても、最も多感なときに本市に居住され、市内の小・中学校

で学ばれた方がノーベル化学賞を受賞されたということは、本市にとって大変喜ばしく、市民にとっても誇れることであり、未来を担う子どもたちに夢を与え、大きな励みになるものです。下村博士から「お受けしたい」と返事をいただいたときには大変嬉しく思いました。

常日ごろから、下村博士は「自分の故郷は佐世保」と同級生の方に語っておられたということで、心の故郷佐世保市からの打診を快くお受けいただいたことに、市民一同で感謝したいと思います。

名誉市民は12月議会で承認をいただいてから正式決定となります。名誉市民として永遠に顕彰し、郷土の誇りとしていきたいと思います。

佐世保市長 朝長 則男

情報クリップ



北京パラリンピック出場報告



10月24日、北京パラリンピック視覚障害者柔道90kg級に初出場した本市出身の初瀬勇輔さん(27)=東京都在住=が市役所を訪れ、朝長市長に成績報告しました。初戦で惜敗しましたが「結果は悔しかったが出場できて光栄でした。出場は人生に自信を与えてくれました」と明るく話しました。初瀬さんは前日、母校の山手小学校で講演し、「どんな困難の中でも、夢を見出し、努力を続けることに意味がある」と後輩たちにメッセージを送りました。

アジア選手権で準優勝



10月28日、バレーボールの全日本ユース男子チーム(17歳以下)のメンバーとして、第7回アジア選手権で準優勝した佐世保南高2年の前田一誠君(写真右)と吉村康佑君(写真左)が市役所を訪れ、朝長市長に成績報告しました。前田君は同選手権でベストセッター賞に選ばれました。

佐世保くんち

11月1日から3日、亀山八幡宮の「佐世保くんち」が開催され、最終日には勇壮な「三ヶ町蛇(じゃ)踊り」が披露されました。くんちの蛇踊りは踊り手不足で一時期中断されていましたが、5年前に三ヶ町商店街青年部の有志により復活。煙を吐きながら玉を追う大蛇は大迫力でした。



歴史散歩



第521回

猫神さま(稲荷町)

馬車引きさんの馬頭観音、大工さんの聖徳太子など、職人が崇める神仏等が安置されている福石観音に、石柱だけの猫神さまが祀られています。猫神様は、愛知県岡崎市その他かつて養蚕が盛んだった土地でよく見られます。

猫は蚕を食べる鼠の天敵なので、養蚕農家が蚕の守り神として祀ってきました。石柱には寄進者と思われる「昭和十二年一月 山口トメ」の文字が彫られており、旧日宇村福石免の農家で養蚕も手がけられていたことを物語っています。

日本では紀元一〜二世紀ごろ養蚕が伝わり、製糸から機織りまで行われていました。蚕の餌は桑の葉で、親蛾が生んだ卵は孵化したあと盛んに桑の葉を食べ、体長七、八センチに成長、二十八日ほどで繭を作り中で蛹



この繭を集め、湯に入れてほぐし、糸口を見つけて十本以上をまとめて一本の絹糸を作るのです。繭一個の糸の長さは千五百メートルもあります。シルクロード、つまり絹の道は中国から中央アジアを通じて南西アジア、そしてヨーロッパに通じる通商の道です。貴金属と同様に憧れの宝物だった絹織物は、ユーラシア大陸東西の大きな交流の歴史を象徴する商品。東の終着点日本なのです。



奈良時代、大化の改新(六四五年)で律令制度をとった古代日本は、公民の口分田で税を負担させ、調にあってるものとして養蚕による絹糸を奨励し、桑畑を広げました。

この調の習慣がその後も続き、近代日本でも貴重な外貨獲得商品として明治初年は花形産業となり、昭和五年にこれまでで最高の四十万トを生産しますが、日中戦争で縮小します。ここ佐世保でも長く養蚕は農家の副業でした。

筒井隆義